

姫路朝祷会奨励 「神様のあわれみへの応答～ 献身～」

姫路あけぼの教会牧師 廣田守男

「ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」（ローマ人への手紙 12 章 1 節～8 節）

◎私達は「献身」という言葉を聞くと牧師・伝道者のことと思いがちですが、全ての信徒の方々もそれぞれ置かれた持ち場・立場での献身者であることを覚えたい。

◎ローマ人への手紙 12 章以降でパウロは、これまでの教え(1～11 章)を踏まえて、このような恵みにあずかったお互いはどのように生きるべきかを教えているのです。

「神のあわれみのゆえに」(1)。キリスト者生活は神のあわれみで始まり、支えられ、守られ、動機づけられてこそ可能であることを覚えます。「こうあるべき」という基準を知っているだけでは決してクリスチャン生活を歩めないのです。だからパウロは 11 章も費やして、神のあわれみがどれ程のものかを書いてきたのです。どれ程のあわれみを受けている自分であるかを理解し自覚することにより、その愛に応えたいとの願いを生み出だされるのです。

「心の一新によって自分を変えなさい」(2)。「心を新たにする」とは、今までの歩みを振り返り、これで良かったかと思い巡らすことによって新しい気づき、発見を得るのです。そして聖霊の働きにより、変えられていくのです。そうすれば、これまでの思い込みも正され、より神の御心に近づくことが出来るようになるのです。

◎「献身」具体的には、3 節以下のクリスチャンとして、教会での礼拝生活と様々な奉仕ばかりか、社会人としても、特に家族、隣人・知人・友人に対して愛を持って仕える生き方も、様々な事柄に直面することにより、私たちの内面も御霊によって新しくされ、御心に適う歩みへと導かれるのではないのでしょうか。

◎パウロは自分のことを「あわれみを受けた見本」と告白しています(テモテ第一 1:16)。パウロは自分を「罪人のかしら」と告白しております。見本は本物へと導く手立てなのです。私たちも「見本」なのです、この見本を見て本物の聖書・キリスト教会・イエス・キリスト様に導かれるのではないのでしょうか？ かつての私たちもそうであったのではないかと思うのです。

パウロは自分の罪深さを自覚し、それを赦して下さった神様のあわれみの大きさを明らかにしているのです。彼はキリスト自らの顕現により回心し、迫害者から、キリストを伝える伝道者、牧師、使徒として用いられるようになったことを深く感謝しているのです。

そのパウロはテモテのために「恵みと平安」との間に「あわれみ」を加えて祈っているのです(テモテへの手紙第一、第二1章2節)。パウロはテモテが若い伝道者であり、多くの戦いがあることを知って、特に病弱であったテモテのことを配慮して「あわれみ」を加えて祈っているのです。

◎パウロは、神様のあわれみを受けた者がそれに感謝し、応答として身を献げて神様の御心に適った歩みをするようにと勧めているのです。

私たちひとり一人が礼拝を重んじ、神様の御心を追い求めて神様にも仕え、人にも仕え、神様の栄光のために与えられた生涯を全うされることを願って歩みたいものです。

「実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。…」(哀歌 3:22, 23)

◎教職・信徒を問わず、雪の中に朝祷会にご出席くださった皆さん、また祷友の一人ひとりが朝祷会のために献身者として使命感をもって祈ってくださることを感謝しております。ここで献げられる一項目毎の祈りの上に神様の豊かな恵みと祝福をお祈り申し上げます。